

シンポジウム「教育実習で学んだものをどう生かすか」の記録

A Report of Symposium "How should we realize what we learned the teacher-training?"

松 浦 善 満 (教育実践研究指導センター)

Yosimitsu MATSUURA

はじめに

一昨年度から教育実習プログラム開発に関する共同研究を附属学校の実習担当の先生方とはじめた。昨年度は、共同研究の成果を「教育実習カリキュラム開発に関する総合的研究Ⅰ—事前・事後指導の現状と課題—」(教育実践研究指導センター紀要no.4,1994.8)に纏めた。

今回はこの改革案(事後指導案)に沿って進めた、実習シンポジウムの記録を紹介する。

このシンポジウムは本実習後、附属小、中学校、ならびに雑賀小学校に於ける事後指導を踏まえて大学内の事後指導として実施された。運営は、教育実習委員会と教育実践研究指導センターが共同でおこなった。

今回のテーマは「教育実習で学んだものをどう生かすか」ということで、教官2名、学生3名のシンポジストが問題提起を行ない、その後、学生と教員が自由に討議する形態をとった。なお、各メンバーはつぎの通りである。

司 会：市川純夫(教育実践研究指導センター長)

問題提起：今井敏博(センター運営委員：数学教室)

：松浦善満(センター専任教官：実践教室)

：春名晃至(3回生学生：附属小学校実習に参加)

：梶原裕樹(3回生学生：雑賀小学校実習に参加)

：下郷貴広(3回生学生：附属中学校実習に参加)

日 時：平成6年12月3日午後2時～5時

場 所：L101号教室

シンポジウムの内容は、この記録を読んでいただければ分ると思うが、問題提起を行った三名の学生、二名の教員の報告、並びにフロアーから発言した学生たちの教育実習体験の重みは特筆してよいだろう。また実習で得たものを、彼等3回生がその後の大学生活で如何に生かすことができるのかといった課題もかなり浮き彫りにすることができた。

なかでも多くの学生が指摘した「大学の学習が教育実習では本当に生かされているのか」といった問いは、教員側が真剣に受け止めなければならないだろう。それは、教育学部の教育をいかに充実させるのかという根本的課題と直結しうる問題提起をも含んでいる。

教員採用率の低下と並行して、教員志望率の低下が顕著になってきているが、これらは

教育学部の在り方を問い直す条件ではあるけれども、大学で学び、また教育実習にとりくんでいる学生たちの実態を明らかにせずして問題の核心に迫ることはできない。シンポジウムがその回答の一つであると考えられる。

1. 挨拶（福本先生）—大いに議論を—

皆さんにとっては、やはりこの教育実習が一番関心事ではなかったのかなと思います。また教育学部としましては、年間の一大イベントとして、この教育実習というのは非常にウエイト付けというのは高いものです。皆さんはちょうど昨年の期末試験が終った段階で、事前指導に取り組んだのです。そして理科系の学生は6月に、文科系の方は、それぞれ9月に本実習を体験したのです。ほとんどの人が教壇に立って授業をすることは、生まれて初めての経験ではなかったかなと考えています。その後学校によって違いますが、9月から11月にかけて、それぞれ実習校で事後指導が行なわれました。そしてこのシンポジウムの企画の基盤になりました実践課題のアンケートをグループで作成していただきました。私が実習に先立ちまして皆さんにお願いしたというのか、話したことがあると思います。それは実習に行くに当たって、とにかく何か目標を持って、課題を持って臨んでほしいということでした。教育実習をそれぞれ体験することによって皆さんがいわゆる教職専門で学ばれたこと、あるいは教科専門で学ばれたこと、そういったことがそのままストレートに教育の現場で実践できたかどうか、おそらく大多数の方が勉強不足に非常に悩まれて、今後しっかり、教科の勉強をしなければいけないと痛感されたのはなかろうかなと思っています。また指導方法といいますか、そういったことについてもそれぞれの子どもの年齢に応じて研究していかなければいけないということを痛切に感じられたと思います。そういったことを、実習校での事後指導で実習担当の先生方とお話をして頂いてそれで「私の教育実践課題」というレポートをまとめて頂いたのです。本日はそういった実習校でそれぞれ体験して来られたことを総括というのはちょっとオーバーですが、この場でおこなうとともに、今後の大学生活で、どのようにそういった課題に取り組んでいくべきか、取り組んでいかなければいけないのか、そういったことが来年度の教員採用にどのように繋がっているのか、ということを実践で検討していただけたらと思います。そして、一年間の実習の最終段階を迎えた段階で考えて頂きたいとそんなふうに考えています。それでは司会を市川先生にお願いしてすすめていただきたいと思います。

2. 司会（市川先生）—発散的な討議でもよい—

ただいま紹介頂きました市川です。今日の司会を教育実践研究指導センターのセンター長として勤めさせていただきます。さて、この場は、大学という研究教育の場ですから意見表明の自由は保障されているわけで、どうぞ学生も教員も自由に意見を述べて学び合って頂ければと思います。参加されている先生方も何も教育実習の捉え方が一枚岩でなくてもいいわけで、実習で学んでほしいことというのは、それぞれに先生方も持っておられるので、そのことを交流し合うところから進歩があると思って自由に発言をして頂ければと思います。何も結論を出すという討議ではない、継続的な討議ではなくて、いろんな課題を出しあって、あっ、そんな課題もあるんだなということを学び合う、発散的な討議でいいと思いますので、どうぞ気楽に発言してもらえればと思います。先ず体験報告として、

実習に行った学生の中から3名の方に報告して頂きたいと思います。それでは付属小学校に実習に行きました春名君からお願いします。

3. 春名君—附属小学校での教育実習—

付属小学校の3年生に配属された春名です。1カ月間の教育実習というのはいろんな思い出がありましたが、本実習の直後は先生を諦めました。自分は小学校の先生に適しているとか、そういう適性みたいなものが分かったのです。いろんなことが体験が出来たということだけでも、しんどくなってしまったのです。

そしてその教育実習から丁度2カ月が経過しました。皆さんはまだ受け持った子どもの名前と顔をみんな覚えていますか？僕は小学校の40人の子どもの名前と顔を一致させるのに1カ月かかりました。最終のお別れ会の時の、ぎりぎりまで顔と名前が一致出来なかったのですけれども、それで大学にもどってから、最近、久し振りに事後実習に行きますと、もう10人ぐらい分からない子どもがいて、とても怖い思いをしました。つまり教育実習中にいろんなことがあって、楽しいことも嫌なこと、しんどいことも、いろんなことがあって、いろんな勉強をしたはずなのに、大学へ帰ってきて2カ月間が過ぎると、普通の生活や大学での講義とか授業がとっても忙しくて、教育実習を振り替える暇がなくて、体験したことが何んであったのか、という気がしてなりません。

つまり大学での講義と教育実習とが直接結び付いて来ないような気がしています。まあそれは僕の勉強不足というのもあると思うのですが、教員の養成をするということを主な目標にした教育学部においては、教育実習というのは大きなウェイトを示していますし、それが大学での講義と結び付いてこないとなると、それは少し問題だなと、いま強く感じています。

また教師というのは、いかに大変なものだということがみんなもよく痛感したと思いますが、僕は常々教師というのは授業が出来ただけでは駄目だ、何でも出来なければ駄目だとずっと思っています。それは塾の先生との決定的な違いで、また学校の先生の存在理由でもあると思っています。実際この実習で、授業時間以外での子どもと遊んだりとか、追い回したりとか、怒ったりとかいうような子どもとの触れ合いというのはいかに大切で、それが子どもにかかってくるウェイトというものがとても大きいものだなと痛感しました。また子どもたちと一緒にいると、思わぬこと、予想しないことがたくさん起こるものです。

例えば一生懸命考えて万全を期して望んだ授業で子どもの予想しなかった一言で、おろおろしてしまって授業が台無しになったということをたくさん経験しましたし、僕の一日担任の時に、クラスで喧嘩が始まったのです。それで喧嘩を止めないと駄目だし、自分は授業の続きをやらなければ駄目だし、理科の実験だったんですけど、理科の実験の用意をしなければ駄目だし、喧嘩はどこで始まってもクラスの収拾はつかないし、もう本当に大パニックになって、散々な一日になったのですが、いざという時に何も出来ない自分というのがとてもいやで、印象に残っています。

そのように予期せぬことが起こっても、状況を的確に判断して、最良の行動が取れるという、いわゆる「臨機応変さ」というのが教師には、とても大切なものだなと、その時に思いました。

そういうことで、ある先生がこういうことを事後指導でおっしゃったのです。教師は5

者でなければいけない。つまり役者、芸者、易者、医者、学者の5つです。この5つを高次元でバランスさせなければいけないとおっしゃったのです。僕も理想の教師像というのは正にこういうものだとも強く感じています。子どもがいつも教師を見ていて、それが子どもが低学年であればあるほど、いろんな意味で教師の影響を強く受けます。だからこそ何でも出来る先生、どんな状況に陥っても的確な判断が出来る先生、というのがとても大切なことだと思います。だからそういう先生を目指して、あと1年半ぐらいですけれども、大学のなかで何にでも取り組んで、いろんな知識や経験を自分のものにして、広く、そして深い視野を広げて行きたいと思っています。当分の間は教採のために勉強を頑張りたいと思います。皆さん頑張しましょう。

4. 梶原君—雑賀小学校での教育実習—

雑賀小学校の6年5組を担当しました梶原です。今日は中学校の実習に行った方も参加されておられますが、中学校の方の状況は分かりませんが、僕は取りあえず雑賀小学校での実習の感想を言わせて頂きます。

雑賀小学校は、各クラス一人か二人ずつだったのですが、僕の方は教生が二人だったのです。だいぶ楽だったのかも分かりません。実習に入る前と入った後で教育観が変わったと思います。皆さんも変わったのではないかと思います。実習に行く前、教師の役目というのは勉強を教えるのがほとんど中心だと考えていましたし、基本的には何ごとも教えるというのが中心だったと思います。

雑賀小学校は自ら学ぶというのがモットーになっています。小学生に自主的に勉強させるというのは難しいことです。「勉強をなさい」と言っても勉強をしません。だからそこを、自分から勉強をする体制を作ってやるのが、教師の役目だということ、そのようなことを、1カ月間で学んできたつもりです。以前は、自分で答えを言ってしまうということが多かったのですが、実習に行ってから、子ども達から答えが返ってくるのを待っていることで、大分気が長くなったような気がします。

色々と苦しんで、今も苦しんでいますけど、授業なんかやってもうまく行かなかった。皆さんもううまくいかなかったのではないかなと思います。自分で答えまで教えてしまったら、まるで塾と同じで講義みたいになってしまうと思うんです。逆に、子ども達の答えを全部待っていたらまとまりがつかず、収拾もつかずに時間が過ぎてしまったりというのがよくありました。

僕は、ちょうど6年生で高学年になると男子と女子がけっこう意識し合って、分れているので、それをまとめるのに苦労しました。ただ6年生、高学年になるとある程度悪いこととかいろいろ分かっていますから、余り叱ることはなかったです。皆さんも苦労されたと思うのは、子どもたちを叱ることに苦労したのではないかなと思います。

叱るのはやはり教師の方は嫌なことです。あまり叱りたくない。でも叱らなければいけない時かならず来ると思うので、僕は一回しかなかったのですが、その時、一日担任の日だったので、朝から教室内で暴れるわ、掃除はしないわ、朝の会を飛ばして歌を歌わないとかあったので、ちょっといきなり朝叱ったのですが、叱り方なんですけど、僕が叱ったのは良かったのか、悪かったのかよく分からないけど、時には叱らなければいけないと思いました。

あと僕はこの教育学部に来たのは出身は九州で、あまり関係ないですけど、教員になりたかったので教育学部で通る所と探してこの和歌山まで来ました。実習へ行く前も当然教師になりたいという希望がありました。なぜ教師になりたいかと言うと、中学校の時クラブをやっていたので、そのクラブの先生に影響を受けて教師をやりたいと夢を持ちました。今もずっとその気持ちは変わっていません。

今までは先生から影響を受けて教師になりたいと思ったんだけど、今度は子ども達から影響を受けて教師になりたいと希望を持ち、そう思って実習に臨みました。結果としては、僕はなおさら教師になりたいと思いました。子どもたちは皆さん思っていると思いますけど、やはりかわいいです。素直だと思いました。相当パワーもあります。だから1日いたらだいたい疲れたんじゃないかと思えます。

教師という役目から、やっぱりものすごく子どもたちに与える影響力があるなと思えました。というのは、各クラスによって子どもたちの性格というのか、雰囲気が違うというのは担任の先生の影響力がものすごく大きいのではないかな、それだけ教師の与える影響力が大きいから責任ある仕事なんだと自覚しました。

つぎに、先ほど春名君も言われましたが、大学の授業と教育実習との結び付きがないのではないのかなと、僕も実習に行くまで、というよりも途中まで完全にそう思っていました。教材研究とかありましたけど、あんなの役に立たないのではないかなと思いつけていまして、学習意欲がないというのがありましたけど、子どもたちに僕達が自ら学ぶという体制をクラスでやるのであったら、逆に考えれば僕達が今教材研究とか学校の授業を通して始めから教えてもらおうとする姿勢ではなくて、その教材研究とかの授業を自分からも学ぶ体制を作る機会だと考えれば生きていくのではないかなと思うのです。個人個人が自主的に勉強をしようと、そういう意欲を持って大学の授業に取り組んだら、これからみんないいのではないかな、授業が生きてくるのではないかなと思います。今そう言う感じで授業に取り組んでいるつもりですけど、あと皆さん勉強をしていると思いますが教採があと半年ぐらいなのでそういう勉強が忙しいと思いますので、教えてもらおうではなくて、自分から学ぼうという姿勢でいったらいいんじゃないかなと思います。以上です。

5. 司会（市川）

ありがとうございました。いろんなことが出てきました。雑賀小学校での勉強を教えるということから自ら学ばせるということへの教育観の変化、自ら学ばせるにしてももちろん教師が何もしなくていいわけじゃなくて、自ら学ぶ力を子どもの中に引き出せるかという教師の力が必要なんだろうと思うのですが、そんなこととか、叱り方の問題とか、梶原君の場合は実習に行ってますます教師になりたいと思った、このへんも皆さんそれぞれに感想があると思うのですが、教師を諦めた人もいるし、あるいはまたなりたい気持ちが強くなったという人、色々いると思うのですが、そんなことも後で述べて頂ければと思います。やはり春名君と同じように大学の授業と実習の結び付き、大学の授業は果たして役に立たないのかどうかという、その辺りの問題が出てきました。そこで梶原君の考え方は、子どもたちに自ら学ばせるということを言うのですから、自分自身も大学での授業に対する姿勢、自分自身も自ら学ぶという姿勢を大学でも持たなければいけないということに気が付いて、そういう姿勢を持っているということが、最後の発言がそのへんも重要な問題

になってくるかなと思います。そしたらまた梶原君の方にもう少し質問と関連した発言を後で時間を作りますので考えておいて下さい。3人目で付属中学校に行きました下郷君お願いします。

6. 下郷君—附属中学校での教育実習体験—

附属中学校に実習に行きました下郷です。受け持ちが2年生です。実習で当然いろんなことを感じたり学んできたんですけど、その中で教師がいかに関心した子どもたちに大きな影響を与えるかということについて、感想を述べさせて頂きたいと思います。

今まで当然僕たちは生徒という立場で、先生という立場ではなかったのですが、大学で生徒でありながら中学校の門をくぐったら、そこで先生になってしまうのです。そこで子ども達に「先生」と呼ばれてしまうということに、不思議な気持ちを感じました。附属中学校の外では別に先生と言われてもピンとこないけど、中に入ったとき子どもたちに「先生」と言われたら、ちょっと緊張してしまうのです。不思議な感じを受けました。

そこでずっと実習するにつれてそこから教師の立場がいかに関心であるかということにつながるのですが、附中の子どもたちに限ったことではないと思うのですが、教師の一歩した行動とか、言葉かけにもすごく敏感に反応して、それを全部吸収してしまうのだな、というような感じを受けました。私が生徒だったとき、学校の先生から影響を受けているという実感はそんなになかったのですが、先生という立場になって初めてあの生徒は、今自分の言ったこの言葉に反応したなと、子どもたちの中にすごい影響を及ぼしているのだというような感じを受けました。

自分は体育専攻なので体育の授業について話させて頂きますと、体育で跳び箱の実習をしたのですが、一歩した言葉かけでそれが完全なものとして、子どもたちは真剣にそれを受け止めてくれる。どうやったら飛べるようになったかというのが、抽象的ですが、手の付き方とかそういうようなことを真剣に全部受け止めているなという感じを受けました。だから教材研究とか色々言われましたけど、自分の経験だけで言葉かけをしたら、いかにそれが危険なものであるかというのを感じました。自分が出来るのに生徒は、なぜ出来ないのか、それは大学でずっと勉強してることなんですけども・・・。

それと、細かな教材研究でその子どもたちの身になってやらないと、中途半端な言葉かけは危険だということをすごく感じました。

大学の授業と実習について、僕の感じる所では、大学で学んだ理論というのはそのまま直接実習に結びつけることはちょっと難しいなと思いました。大学で様々な実践課題とか勉強しまして、こういうようにしたら子どもたちはこういうふうに関心するのではないかと、ある程度授業等するのですけれども、実際には、子どもたちはその通りに動いてくれないのです。そこで自分の方法は間違っているのか、そういうことを思ってくるのですが、大学の授業と教育実習での実践との違いがあるように思います。それは、子ども達は純粋に、自分たちのことを先生に、しっかり認めて欲しいと思っていることを、理解してあげることが大変重要であるというふうに関心します。大変簡単なんですけど終わります。

7. 司会（市川）

ありがとうございました。付属中学校に行った下郷君から、教師の影響力の大きさ、ま

た教師への真剣な反応、だから中途半端なことではいけないというような感想、それからやはり前の二人も言っていましたけれど、大学における授業と実践の関係、理論と実践の違いの問題等が出されました。やはりこれについては皆さん多くの人が感じておられる所もあるし、あるいは先生方も大学における学習と教育実習との関係について、思っておられる考えを述べたい所もあると思うのですが、まずは三人の体験報告が終わった所ですので、もしありましたら三方への質問でもいいですし、3人が述べたことに寄せて自分はこう思うということを自由に発言して頂ければいいし、あるいは先生方からも3人の方にここはどう感じたか、そういうことでもいいし、個人個人の意見でもいいし、述べて頂いて結構だと思います。少し時間を取りたいと思います。今の三人の発表を巡っていかがでしょうか。遠慮しないで手を上げてくれればマイクを回します。大学の講義と研究実践の関係ということは、ちょっと時間をかけて後で最後の方で討論しなければいけないテーマだと思います。

8. 碓井先生—どういう点で教師に向いていないの?—

最初、春名君が小学校の実習に行って自分が教師に向いていないということが分かったとこういう話だったね、具体的にはどういう点で自分が小学校の先生に向いていないのか、どういうふうに考えたのですか。

9. 春名君—子どもを包み込むことができない—

子どもは前から大好きだったんです。それでクラブでも子どもに接する機会も多くて、子どもがとっても大好きだから先生になれるなと思っていました。ある先生も子どもが好きだということは先生になる資格は十分だと言っていましたけど、僕は怒りっぽいです。短気なんです。子どもにこうしなさいとか、掃除しなさいとか言う時でも我慢できなくて、すぐに大きな声で怒ってしまう自分があって、そういう時でもほうきを振り回して追いかけて回したこともありますし、本気になって怒ってしまうから、自分が子どもやなと思って、これだったら小学校の先生に向いてないかなと。子どもをどこまで包み込めるかという器が、自分はおちょこぐらいかなと。そういうところへんから駄目かなと思ったのです。

10. 司会 (市川)

春名君は自分はそういう面では向いていないかも知れないけど、教師にはなりたいたい、こんなことは、それぞれにあると思うのですが、こういう所でしゃべりにくいかも知れませんが。他にありませんか。それでは次の、先生方のほうからの発言に進んで、後で討論の中で今の三人の発言を生かしながら討論を進めるということにしたいと思いますよろしいでしょうか。それでは次に問題提起ということで、教育実習についての研究等をなさっておられます今井先生、教育実習の委員でもあられます数学の先生です。その次に教育実践センターの松浦先生です。そういう順で問題提起をして頂きたいと思います。

11. 今井先生—実習前後の学生の意識と現職の先生—

こんにちは。私は専門の関係もありまして算数教育を担当しています。プリントに基づいてお話をしたいと思うんですけど、ここにはそれぞれのご専門の教科の方もおられます。

だから自分の教科に置き換えながら聞いて頂いたらと思います。プリントを見て頂きます。

実は昨年度1993年度ですが、付属小学校に実習に行った学生（69名）の実習の直前と実習を行った直後に同じアンケート調査を致しました。算数の授業ですが、実はそれと同じ項目で小学校の現職の先生（89名）にも調査を行いました。

ここでは、主なポイントだけをデータを使って紹介します。なお、現職の先生は30歳までの方は35%、40歳までを含めると75%です。最初の例ですが、効果的な指導ということで「得意な子どもたちに効果的な指導を3つ挙げてください」「不得意な子どもたちに効果的な指導を挙げて下さい」と。それから「得意な生徒に不適切な指導を挙げて下さい」「不得意な生徒に不適切な指導を2つずつ挙げて下さい」という項目です。項目は同じものですね。表1を見て頂きたいのですが、先ず「算数の得意な子どもに対する効果的な指導」であがってきたデータ、実習前、実習後、現職の先生、3つ挙げています。ポイントだけ拾いたいと思います。先ず8番ですね。「発展的に学習する」これが非常に高いわけです。実習生も高いですね。60%ぐらいです。現職の先生になると80%に上がります。実習生より現職の先生は子どもたちに発見的に指導されている、子どもたちに発見させていることがわかります。

それから10番。これは実習生の方は58%から62%に上がっています。現職の先生は70%ですね。いくつかの考えを出して、授業でいろんなアイデアを子どもたちから学んでいる。これが高いです。それから12番、「自分で考えだした方法を大切にする」これは、順位は3番目ですが上がってきています。ここで自分の考えを出した方法を大切にする」というのは、自分で子どもたちに説明できるような場面が必要だということです。

ページを開いて下さい。表2ですけれども「算数の不得意な子どもに対する効果的な指導」についてです。ピックアップの所は7番ですね。「具体的操作や教具をいれた指導をする」が、実習前の学生は33.8%、実習後は55%に上がっています。現職の先生は84.3%、これはどんどん上がっていくんですね。経験を積むほど不得意な子どもに対して具体的操作によって発想させる、あるいは物を使って説明する。

それから11番。「自分の分からない所をはっきりさせる」、これは実習生の方は非常に高いのです。実習前後で、57.4%から44%に少し下がっていますが、現職の先生は24.8%とずっと低いです。不得意な子どもたちに自分の分からない所をはっきりさせようとしても、自分の分からない所自身なかなか分からない、という現状ではないか、そういうことを現職の先生は考えているのではないかと思います。

それから3番ですね。「算数の概念を身の回りの生活等の事柄と関係付けて指導する。」これが実習生は37.7%から27.5%とちょっと少なくなっていますが、現職の先生は43.8%と多いですね。出来るだけ具体的な身の回りの事象と結びつけた指導が大事だと現職の人は思ってもらえるんですけど、実習生の方にはこれが難しかったのではないのでしょうか。授業の中でそういう場면을教材と結びつけるということが難しいので下がったのだと思います。

次ぎ表3を見て下さい。「算数の得意な子どもに対する不適切な指導」これは一番多かったんです。先ず9番。「得意な子どもだけ集めて特に進んだ問題をさせる」これが余りよくない、不適切だ、というふうに実習生は50%台に上がっています。しかし現職の先生は

少し高いですが、数字が下がっているんですね。現職の先生は、そういう場面であってもいいと思っているのでしょうか。それから1番。「最も簡潔なアルゴリズムの公式を覚えるように指導する」、これはこういうやり方をすればこういうふうに来るのだという訓練ですね。これがやはり不適切なんじゃないかなというのが多いわけです。

次ぎ14番、「算数の不得意な子どもに対する不適切な指導」。これは「不得意な子どもだけを集めて特に基礎的な問題を練習させる」ということです。これは実習生は非常に、基礎的な問題を練習するというのは、実習前も、実習後もよくないのではと、思う人が多いですね。現職の先生は意外とこれが低いわけです。したがって不適切と思っている先生は意外と少ないです。

それから1番の、「最も簡潔なアルゴリズム、公式を覚えさせるような練習を多くする」という、これは不得意な子どもたちに対する不適切な指導であろうということ。これは実習生が実習後に非常に強く感じた、と思われます。現職の先生は、しかし実習後の60%ほど高くはないですね、30%ですから。ですから不得意な子どもに対してはそれほどこういう指導は不適切だとも言い切れないと現職の先生は思っているんですね。

それから10番ですね。「いくつかの考えを出すようにする」ということ、これは現職の先生は不適切だと思っている人が実習生よりは少し高いです。不得意な子どもには、こういうふういくつかのアイデアを出すのは難しいのではないかなと現職の先生は思っておられるのかも知れませんね。

次ぎDですね。机間指導。実習の授業の時に教室の中で歩くようにしますが、生徒の間を見て回られた時ですが、そこで子どもとの関わり方を問うたものです。1番は、「遅れている子どもに対して学習指導をする」これが非常に高いですね。しかも実習前、実習後、現職の先生になるにしたがって段々数字が上がっています。2番目は「子どもの考えを助けるように声をかける」、子どもの活動を見ていて、子どもによって声をかけていく、これが二番目に多いです。これは実習生も現職の先生も同じ傾向です。それからC、「教科書の使用」については、ここでは3番、「教科書は何を教えればよいかを知るために利用する」というのは、実習生は実習前と実習後とも高いですね。実習生は恐らく教える内容を自分が選択するために教科書をフルに使ったということですね。でも現職の先生の高い数字は1番の「教科書の例題を用いて算数の内容を指導する。」あるいは4番の「教科書の練習問題を子どもに解からせる」、つまり教科書の例題を使って授業をスタートさせ、最後にまた教科書を用いて練習させる。途中は先生自身がアレンジして自分で構成して作り上げていくといった過程が見てとれます。

これはあくまで算数を題材にした一例にすぎないわけですが、どの教科でも得意な子ども、不得意な子ども、それから進んでいる子ども、遅れている子ども、その教科を好きな子ども、嫌いな子ども様々いますね、そういう子どもたちを授業の中で先生たちは対峙していくわけですね。このような多様な子どもたちに指導していく必要が出てきます。その時に、さて自分の担当する教科ではどういう指導、どういう授業が効果的か、この機会に一度自分なりに整理をして頂きたい。勿論、それぞれの教科に特性があると思いますがなおかつ整理をして頂きたい。そのことが私の問題提起です。

12. 司会（市川）

どうもありがとうございました。数学という教科の一つのケースで授業するには、という視点からの問題提起を頂きました。しかも今井先生には、数学に限らず一般化して問題提起を頂いたと思います。質疑討論は次の松浦さんの問題提起の後、お二方の問題提起をまとめて頂きたいと思います。また、付属中学校に実習に行った学生の方に、後でちょっと指名させていただきますので準備して頂けたらと思います。それから後の討論の中で実践課題でこんなことが書いてある、ここが今、議論しなければならないというような所を見つけて、これまた指名させていただきますので、特に実践課題を書いてくれた代表者の所に名前がある人は覚悟しておいて下さい。あるいはこの問題については、自分のグループのこの人の方が考えているということだったら、その人に言ってくれても結構ですが、そんなことになるかも知れませんので、準備しておいて下さい。それでは続けて実践センターの松浦先生の方から問題提起をお願いします。

13. 松浦先生—私もかつて教育実習を体験した—

私の方は今日配りました資料、これは君達が書いてくれた資料を一覧表にただけですが、これを中心にして話したいと思います。実は私も20数年前に教育実習に行った経験があるのです。その頃の教育実習の様子を思い浮かべながら、今日こういう場でこういうことをやるなんて、自分自身でも不思議だなあとと思っているんです。20年前と比較して、現在の状況は、すごく変わりましたね。

それは、教員への門が、非常に狭くなったということです。昨年の卒業生の就職を見ても、一回で採用試験にパスした学生が何人位いると思いますか。みんな関心あるから知っていると思います。20人ぐらい？、もうちょっと多いです。33人です。だけど恐らく200人近く受けているのですから、並大抵なことではないと思います。大学の入試よりはるかに難しい。皆さんの中にもすでに教職は無理という諦めの気持ちをもっている人がいるかもしれませんが、私は希望持ってほしいと思うのです。それは、非常勤の講師で70人以上の人が頑張っている、そして次回に期そうとしている。こういう数字を見るとやっぱりこれは捨てたものではない、そういう意味でこの会合を実りのあるものにしたいと思うのです。

ところで、20数年前だったら、誰だって、免許を持っていれば就職できた時代だったのです。僕はその頃大阪市に住んでいました。大阪市は教員がいなくて、採用の為に沖縄まで、教育委員会の人が一生涯懸命に足を運んで免許のある人を探し回っていたんです。そして教職員の大きな寮を建てまして、そこに地方からの新任の教員を住ませました。今その寮は廃寮になってしまっていて、誰も住まなくなっています。それは教員の数が減ったのが大きな原因です。

第二は、子どもの状況、中学生、小学生の状況が20年前と変わったということです。

君たちの場合は授業のテクニックとか授業の技術とかを一生懸命学ぶのですが、これは今の子どもたちにどう対応していくかということの必要から来ているのではないかと思います。それと同時にそれだけに目を奪われていたら何か大事なものが失われる可能性もあるのではないかという感じも少ししているわけです。

これは子どもの状況が非常に変化して、学習中心の社会ですから、勉強から取り残されたら大変だと誰もが思っている。そして、学校の教師はいつも親や社会の期待と批判の間で揺れ動いているわけです。そういう中へ、君たちは飛び込んで行くわけですから、これは相当な力をつけなくてはならない。そういう状況の中に置かれているんじゃないかなと思うんです。

第三は、これは非常にいいことなんですが、教師の給料は他の職業と比べたら相対的に安定しています。教師は就職してから退職するまで、途中でやめる教師が非常に少ない、アメリカだったら4年に1回とか、5年に1回とか免許を更新して、そのつど止めたり、入ったりで非常に不安定、給料も相対的に安い。

そういう意味では日本の先生の給料は安定している。この間、授業で新任の教員の給料表をみんなに配りましたが、みんないいと言っていました。そのようにいいことももちろんあるのですが、前者2点からは、非常に厳しい中で大学生活を送っているということ。これは大学だけでなく、大学の教員にとっても大変な問題です。そういう意味では是非そんな大きな視点ももってほしいと思います。

次に教育実習の中で君たちはどういうものを学んでいるのか、そこには何か問題はないのかということなんです。それは今日の資料で教育実習のグループで、あるいは個人で君たちが、どんな課題を持っているのかということを一覧表にさせてもらいました。大事なことがたくさん書かれていました。この中には卒業論文のテーマにしてもいいような内容もあるのではないかなと、整理しながら思いました。

例えば雑賀小学校で理科の授業でも、算数の授業でもたくさんの教材の工夫をしています。2年生の授業で三角形とか四角形を子どもたちにどのように意欲的に学ばせるのかということで、ウルトラマンに出てくるような怪獣を持ってきて、その周りを動かしているような図形の勉強をしたというふうに書いています。僕は見ていなかったのですが、記録を見るかぎり、子どもたちがすごく乗ってきたのではと思うのです。附属小学校の記録を見ると、すごい議論をしているんですね。「指導案はいるのか？、いらないのか？」といった、ディベートをやっているんですね。指導案というのは、実習に行った人はみんな知っているんだけど、教師の指導過程と子どもの学習過程が書かれてある、それに則ってきちっとやっていけばよいようなのですが、先程春名君か誰か発言していましたが、突拍子もない疑問や、方向の違う意見が出てきた時には対応出来ないじゃないか、むしろ指導案がない方がいいじゃないか、もっと柔軟に指導過程を考える方がよいのではないのか、という立場の人と、いや完璧な指導案こそ大事だ、そういった議論をしているみたいですね。これも非常に大事なポイントでやっているんだなあと思いました。

これは個人だと思うのですが、附属中学校の実習生で、「私は、歴史の流れの分かる授業をしたい」と書いています。これは、どういうことか分かりますか。自分が中学校、高校で受けてきた歴史の授業というのは、歴史事象の丸暗記だった。どんな流れで歴史が流れているのかさっぱり分からなかったから、この附属中学校で流れの分かる授業を作りたい、これはすごいテーマですね。そういったことを読み取りながら、この教育実習の持っている意義、深さを、私は逆に学ばされた気持ちです。そして君たちが持っている鋭い課題意識を大学の授業とか、あるいは卒論とどう結びつけていったらいいのか、そのために我々教員はどういう指導や援助が出来るのか、そういうことを聞きながら反省させられて

いました。このへんはむしろ大学側の課題でもあるんじゃないかなというふうに思いました。

つぎに、この教育実習の中で君たちが今まで小学校の6年間、中学、高校の6年間、計12年間、極端に言えば受け身の側、学習者の側に立っていたんですね。それが一変して教育実習では教える側になる、こういう転換作用は君たちにももの大きな刺激を与えているし、この教育学部の学生でなければ味わえない一つの体験だと思います。

例えば、この実習に参加するにあたって、背広を買った人がかなりいるわけです。僕の時代は背広なんて高くても買えなかった。普段着できちっとした服装で行ったわけです。ある面では君たちにとって窮屈かも知れないけど、この背広を着るか着ないか、また議論したらいいと思うけど、いずれにしても君たちは社会化されていく。大人の社会を除く、あるいは入るといった体験であると思います。だから教育実習の中で授業の作り方とか子どもを見るということと同時に、学校の先生方の社会を少しでも覗けたというのも、大事なことです。

いろいろ議論してほしいと思います。以上です。

14. 司会（市川）

はい、ありがとうございました。生き方を選択するきっかけとしての教育実習という、そういうような話しも最後にありました。それでは、二人の先生方の問題提起、お二方それぞれ違う角度から題提起がありました。ここで質疑をしたいと思うのですが、何かご意見、質問ありましたらお願いしたいと思います。

15. 寺岡君—理論と実践は結び付く—

寺岡と言います。最初に発表して下さった三人の方々にそれぞれの方の中にあったことですけど、大学での講義、あるいは理論と、実習に行った時の実際とが結び付かないということがありました。僕は結論から言いますと、その理論と実習とを結び付けられると思います。それでどうして実習、実際の場面と理論が結び付かないかということを考えると、3つぐらい考えられて、一つは子どもがその理論に合わないぐらい、今の子どもの現状が変わっているということ。2つは、大学で学ぶ理論そのものが問題だ、また教え方が悪いんだということ。3つは、理論と実際の場面を結び付けれる本人の力量の問題。この3つがあると思います。

それで一つ目の子どもの実態に関してですけど、今までに作られてきた理論が急に子どもに合わない、というのはまず同じ子どもだから、考えられないと思います。それで大学での授業がいけないのかというと、大学では理論はやはり教えるもので、実際の一つ一つの場面について大学で教えていたらきりが無いと思います。それで結局理論と実践とを結び付けるのは、自分本人の問題ではないかと思い、僕自身は結び付けていると自分で思っています。だから理論と実践は結び付くのではないのでしょうか。以上です。

16. 司会—「数学嫌い」の生徒の指導をどうする？—

ありがとうございました。3人の最初の、体験発表の中に出ていた理論と実践の問題について早速話しがあったわけですが、これは重要な問題なので一つの柱とっていて、も

うちちょっと後でと考えていたのですが、ここで出されましたので、これについて発表があれば。ほかの人たちどうでしょう、せっかく今発表がありましたので。実践と理論、あるいは大学での授業の問題。最終的には本人のやり方によっては結び付けられるのではないかというような話が今ありました。

この問題は先ほど言いましたように、まとめて時間をとって論議をする必要がある問題ですので、また後で取り上げたいと思います。後で一つの柱として討論しますので、皆さんちょっと考えておいて頂きたいと思います。

今、お二方の先生の問題提起についてとりあえず質問とか、あるいは自分たちの考え方があったら、ということをお願いしていますので、その討論について何かあったら。いかがでしょう。今の方のように積極的に手を上げて下さい。

先ほど言いましたけど、今井先生の方から数学に限らず一般化した問題だと思うのですが、とりあえず数学について、「得意な子」「得意でない子」に対する指導法という、それを実習生の実習前、実習後あるいは現職教員がどういう指導法が望ましいのかというようなことをアンケート調査を紹介しながらお話し頂いたので、付属中学校で数学の実習に行っている人たちも、そのへん正に自分の問題と重なると思うのですが、数学の嫌いな子が多いけど、どうやったら好きになるのかな、どうやったら数学の面白さを伝えられるのかなということについて、研究課題にしてみたいと書いてくれているので、少し思っていることをそのへんと結びつけて述べて頂ければと思うのですが。北村しのぶさん、お願いします。

17. 北村さん—実験から数学的思考力をというが?—

私は中学校3年生を受け持ったのですが、そこにも書いてある通り、私たちはいろんな具体的なものを使って、例えば関数だとブラックボックスとか、ばねばかりだとかろんな実験を通して、そこから数字を起こして数学に結び付けるといふような方法を取りましたが、実験や具体的操作や教具を使うと、どうしてもそれにかまけてしまうというか、そればかりにかまけてしまって、そこから数学的な理論に持っていくのが非常に難しかったように思うのです。

私の場合は三角形の外接円をやったのですが、どうやったら一般化できるかとか、いろいろ考えていると結び付け方がすごく難しいなと思いました。そのへんまだまだ時間がなくて、どういうふうに工夫すればいいか、それはなかなか見つけられなかったのですけれども、そのへん今井先生はどういうふうな工夫をされているか、ちょっとお聞きしたいなと思っています。

それから「いくつかの考えを出すようにする」という項目がありましたが、算数の不得意な子どもに対する不適切な指導で、現職の先生方は「いくつかの考えを出すようにする」というのを2番目に挙げていますが、説明ばかりをこちらがしていると、すごく生徒が退屈しますし、生徒自身に充実感がありません。こちらは一方的にしゃべるので充実感もてるのですが、生徒にとっては非常に退屈な授業になると思うのです。そこで発表させるところちが思いもよらなかった考えなど、色々でてきたり、そこで指導案の考えとか、いろいろな問題が出てくると思うのです。

また、そこでの発言の取り上げ方とか、難しい点がたくさん出てきて、なかなか結論と

いうか、私たちの研究課題の結論が見えてこなかったのですけれども、そのへんを少しお話を聞かせて頂ければうれしいと思います。以上です。

18. 司会—実習に必要な力とは？—

はい、ありがとう。いくつかの具体的操作を取り入れる試みをした、それがなかなか数学の理論に結び付けるのが難しかったとか、そのことについて説明させる、発言させる授業の試みだけでも、どれを取り上げてどう説明していったらいいかという、難しさがあるというような話が出ました。

どなたか小学校の算数のほうから。算数に限らず指導法という問題ということにしたほうがいいですね。それでは今お二方の問題提起に関してということを行いました、もう討論の時間にしまして。最終的には、このシンポジウムのテーマが実習で学んだことを大学でこれからどう生かすかというテーマにしてありますので、そこへ話を持っていきたいと思うのですが、いきなりそれは無理だと思うので、先ほど松浦先生の方からも出ましたけれど、指導案の作り方の問題、指導案は必要なのか、指導案にこだわりすぎると失敗してしまうとか、そういう具体的な問題を経験しているでしょうし、発問が難しいということを経験しているでしょうし、そういう具体的な教育実習でぶつかった問題、持ち帰った課題というものを少し話し合って、そこからそれじゃ一体どういう力が足りなかったからそういうことになったのか？。

先ほどの話にも出ていました臨機応変に対応する力は一体どうやったらつくのか、そのあたりを問題にしていけば。それでは大学で何を学んだらいいか、という話につながっていくと思うので、少し具体的に、いま数学の人からも出ましたので、授業の指導でぶつかった問題点、感じている問題点、そのへんを出し合うということ、残りの時間も少しですけどそのへんから始めていきたいと思うのです。

発問の難しさ、「子どもたちにどう発問したらいいのか」というテーマを書いてくれた人が多かったのですが、それでは、そのなかから川瀬まち子さんのグループで討論したこととか、自分の考えている発問の問題についてとか、授業でぶつかった問題。

19. 川瀬さん—苦労した「発問」—

私自身の体験から話させていただきます。「大研（研究授業）」で小学校2年生の道德の授業をやらせてもらったのですが、導入部分でどういう発問をするか、ということですごく悩みました。低学年ですから、言葉一つ一つがすごく重要になってきて、第一発問で、「心に残ったことは何ですか」という聞き方と、「心に思ったことは何ですか」という質問の仕方と、「心に一番印象に残ったことは何ですか」という聞き方の三通りで、最初の「大研」の時は「第一印象は何ですか」という聞き方をしたのですが、その前の模擬授業の時に「心に思ったことは何ですか」という質問をしてしまって、その第一発問ですごく授業の流れが変わってしまったというのがあって、第一発問というのは重要だなというのが分かったのですけれども。

最初の発問で、子どもの意見をどういうふうに発展させていくかという方向性が決められていくと思うので、授業を始めるにあたって導入部分での第一発問というのが鍵になるのではないかなと実感しました。

20. 司会（市川）

適切な発問を作ること、第一発問が重要だという声が聞けましたけど、それには適切な発問を作るのにどういう力が必要か、そのあたりが問題になると思うのですが。教師としてのどういう力があればその発問を作ることが出来るか、授業案をどう作るか、この辺りが重要になると思うのですけれども。

そしたら、もう一人。発問の問題を書いている道下さんお願いします。

21. 道下さん—小学校低学年は言葉から—

小学生だったので抽象的な発問をすれば、生徒の反応が全然返ってこなくて、例えば道徳の授業であれば「この子の行動についてどう思う？」というような発問では、全然子どもたちがのってこなかったです。言葉一つ一つすごく大事だったので、中学生とか高学年の生徒を相手にするよりも小学校の低学年、中学年だと、質問の前に言葉づかいから気を付けなければならないということで、すごく苦勞しました。

発問も、一つのことに對してもいろんな言い回しがあるのですけれども、やはり一つに統一して、なるべく子どもの素直な意見が出るような発問をしたらいいなというのは分かっているのですが、そのためにはどうしたらいいかは、1カ月間では分からなくて、その点でも苦勞しました。

実習最後の日に、「授業のテクニックというのは、教職についてから身に付けるものであって、教育実習の1カ月では子どもが好きだなと思うことができたならそれで十分だ」とアドバイスされたので、少し安心した面もあったのですけれども、これから発問とか指導案について、教職についてからだんだん分かってくるものではないかなと思っています。以上です。

22. 司会（市川）—どんな力が発問と結び付くのか—

はい、ありがとう。いま私の一存で、発問ということに絞って具体的に聞いているのですけれども。例えば大学での授業、教材研究とか、あるいは教育方法の授業とか、そういうことを学べば、そういう発問がきちっとできるようになるかという、そういう問題なのか、あるいはそうではなくて一体どういう力を身に付ければ適切な発問ができるようになるのか。現場での経験を積みなければならないのか、そのへんの問題を考えていってもらうためにも発問ということを取り上げた意図があるのですが。

それでは授業案云々のことで、先程から出ている臨機応変に対応する力、授業案に固執していると失敗する授業がある。あるいは、だけでも授業案を立てることが重要である。そのへんの論議がかなりのグループでされているようです。そして臨機応変に対応するための力というのはどういうものなのか。そういう力が自分たちには欠けているという論議がされたグループが多いと思うのですが、そのへんについて意見を出して頂こうと思います。

23. 前田君—授業の目標を明確にしたが—

僕らの班の話し合いでは、実習の前と後で随分議論が白熱したのですが、やはり授業を

するには、自分のねらいとか目標がはっきりしていれば、子どもの突然の突拍子もない意見にでも自分なりに処理が出来るのではないかという話が主だったのです。

授業の間で発問に対する考える時間をどのように設ければよいのか、この場を借りて、いろんな人の意見など聞けたら、心に引っ掛かっていた部分が解決するかなと思っているので他の人の意見を聞きたいと思います。

24. 司会—実習生は、積極性に欠ける面はないだろうか？—

先ほど出ていた、それでは大学での授業というのは、どういう力をつけてくれているのか、実際の現場で役立たないじゃないか、結び付かないじゃないかというような提起も割と多くの人にあるわけです。

一つだけ私の方から挑発的に問題提起をしておくと、先日、実習校の実習担当の先生方、校長先生が集まって、実習の反省会をやりました。その中で「非常に実習生がちゃんとしてくれた。礼儀も正しいし、非常にいい実習生だった。自分たちが言ったことはきちんとやってくれるいい実習生だった」というのが出された。「けれども」というのは大体の先生方で、あと付け足して、「自分からこうこうこういうことをやりたい、自分からこういう課題をやってみたい、自分からの積極性に少し欠けるのではないか、もう少し前の実習生のような大胆さというか、自分からやってみようという姿勢に少し欠ける」という、そういうお話を遠慮しながらですが、大体の実習校からおしなべて出されました。

例えば大学で学ぶことは何なのか、教科書から充実して授業案にきちんと書けるように、そういうような教科学習をたくさんすれば、基本的な自分から学ぶとか、自分から学んで伸びる姿勢がついてくるのかということ、またそれは少し違うようにも思う。少し挑発的に聞きますけど、一体、大学で何を学ばいいのか、大学と教員訓練校、教員の技術を訓練するテクニックを磨く教員訓練校の違い、大学とは一体何なのか、という本質にも関わりますけど。

25. 柏原先生—「臨機応変」とは—

国語学をやっています柏原ですが、先程から出ています臨機応変という言葉ですが、機という言葉は時と場合というふうにとられる人が多いと思いますが、実は機根ですね。こんは根という字、一人一人の持っている能力なり性質なり資質というか、そういうものを機という字、児童・生徒の機根がどのようなと、どういうことが分かり、どこでつまづいているのか、そういうことが実は臨機応変という場合には大事な問題ではないだろうか。

この子、変な突拍子もないことを言っているけど、なぜそういうのかなあと、このことを教師側が理解できることが臨機応変ではないかなと思うわけですね。そこまでのいろんなことが理解できる能力というのは、やはり大学の高度な抽象化された基本へと絞り込んでいくような、そういうものが一方にあって、そのつまづく子どもたちの機根、結び付ける仲介者として、実習生なり教員なりがあるのではないかなというふうに考えております。

26. 司会（市川）

ありがとうございました。どこでつまづいているか理解できる力、基本的な力というお

話がありました、ほかにこの問題について、大学での授業との結び付きということ、それぞれに思っておられると思います。遠慮なく。

27. 中村君—大学の授業（教職）は何がねらいなのか？—

付属小学校4年生を担当した中村ですけど、大学の講義に関して思ったことがあるのですが。小免教科と教材研究というのは小学校の免許を取るためには、必ず取得しなければいけない科目になっているのですが、その授業を受け持っておられる先生方というのは、いずれ教育実習に行くとして、対象にして授業をされているのですか、どのようなことを心掛けて講義をされているのですか、ということを知りたいと思っています。

28. 司会（市川）

そのへんについて先生方からの答えでも結構ですが。

29. 出原先生—現在の教育実習は本当に役立っているか？—

保健体育ですが、両方とも担当していますのでお答えします。私は基本的に教育実習不要論者で、今のような教育実習だとやらないほうがよっぽどいいと思います。そういう考えをもともと持っています。

なぜなら教育実習の1カ月間と、もしも停年まで勤めるとしたら、教員生活を小学校の先生は38年間勤めるわけですが、38年間と1カ月とは約400倍ですね。400倍勤めれば400回失敗できるわけですから、どんなひどい人でも最後は必ずいい授業が出来るようになります。ですから役に立つか、役に立たないか判断基準の所が一番問題で、教育実習期間中にいい授業が出来るなんてあり得ない。先ほど誰かの発言の中で、いい授業なんか出来なくていい、子どもを好きになればいいとありましたが、そのことは大事だと思っていました、逆に大学の授業が役に立つか、役に立たないかの問題を教育実習がうまくいくか、どうかに求めるのは、私は間違っていると思います。

松浦先生も昔の話をされたので、一つだけ私も昔の話をさせて頂くと、私は自分で現場の教師になった時、最も役に立ったと思ったのは、大学時代の講義でもなく、教育実習でもなく、大学時代のサークル活動の体験です。これは自分たちでゴールを決めて、自分たちで段取りを立てて、自分たちで活動して、自分たちで総括をして、また新しい活動をする。自主的な、自覚的なサークル活動の体験が後から思えば自分自身の教師生活に最も役に立ったと考えています。

大学の講義はそのことを土台にしながらも、例えばこの問題は、誰の本を読めばいいとか、この問題は一体どんな切り口をすれば、これから明らかになるのかとかという、教師になってからの授業とか、様々な問題の位置付けであるとか、解決の仕方の手掛かりを示してくれるのが大学の講義であると考えて、私は自分自身の教育研究とか、小免体育の授業の講義をしているつもりで、教育実習にすぐに使えるような技術は絶対に私は皆さんに教えたくなないと、考えてやっているつもりです。一人の意見です。

30. 司会（市川）

ほかに。学生の方からも、あるいは先生方の方からも。

31. 今井先生—算数教材法研究のねらいは—

私は算数教材研究法を担当しているのですが、半期ですけれども、算数の内容はどうかがありますか、ということを知ってもらいたいということと、もう一つは、それを用いて授業をしていく時に、それを子どもがどんなふうな予想をするのか、という目をもって算数の内容（概要）を見つけて頂きたい、そういう気持ちで授業をしているつもりです。

これは先ほどの数学の方の質問があったのですが、数学の教育法でも私は数学の内容自身が、どういうものかということをお先ず知って頂いて、すぐにそれを使えないと思うのですが、まず知ってもらおうということが一番で、つぎにそれを用いて子どもに対応できるような自分自身の資質を持って頂きたい。

ちょっとこの場を借りて、先ほど話にありました具体的な活動をどこで取り入れたらいいとか、発問をどうしたらいいとか、難しい問題を数学の授業でぶち当たったということをおっしゃったのですけれど、そういうものを今後見直していける力を大学でつけてもらいたいというような気持ちでいます。

32. 司会（市川）

指名しませんので。さっきの出原先生の答え、どうですか。中村君でしたか。その後、言うことは。

33. 中村君—もっと聞きたい—

ほかに教材研究を持たれている先生、いると思うので、個人的に一つ聞きたいのは、僕はちょっと授業を見せてもらった時、いなかったのでも申し訳ないのですが。家庭科教材研究がよく分らなかったのでも、先生の講義の主旨を、お伝えして頂きたいのですが。

34. 司会（市川）

個人的なことが出ましたが、お伝えする機会があれば結構ですが。

35. 倉盛先生—家庭科教材研究法のねらいは—

どう答えていいのか、と思っていますけれど。私は家庭科教材研究をもっていて、家庭科という教科というのは、どういうねらいをもっているのか、ここの所を理解してほしいと、それから先は、教科の独自性を理解してほしい。そこの所に重点を置いているのです。注文がありましたらまた聞かせて下さい。

36. 司会（市川）

個々の問題についてはいろいろ授業に関して、要望なりあると思いますし、それを出して頂くことは非常にいいことだと思います。そのへんで会話が成立していくと思うのですが。

37. （山田君）—教育学部の教員養成とは—

先程から話題になっているのは、市川先生が、大学の教育学部で教員を養成するのは養

成所のそれとは違うと言われて、僕もそのように思いました。教育学部だから、この場合はこういうふうに教えなさい、その時にはこういうふうに教えなさい、というのであったら、全部、教師というのは同じ型にはまったものになってしまうのではないかなと思うのです。

個人個人が自由な考えを持っていいんじゃないかなと思うので、個性を持って、あとははっきり言って、教育実習に行くくらいでは、ろくに教えることもできないし、大学出たってここで免許を取っても、すぐ出来るわけじゃないと思います。一番いいのは実践で、本当に教壇に立って教えてみて、その中で上達していくものではないかと思う。教え方どうこう言うのは問題ないんじゃないかと思います。

38. 司会 (市川)

そしたらもう一人。

39. 有本君—大学の授業が大事だとわかった—

中学校に行きました有本と言います。僕は英語科の方に行きましたけど、英語の授業をする時に、みんな困り果てていたんですけど、授業を英語でやった方がよいという方針であったので、結局、自分の力、英語力、を問われるということになったのです。

そのとき大学の授業を、あそこでちゃんと勉強しておいたらと思った時がありました。

また教育方法の授業でも、一応習ったことだったんだけど、授業案の書き方などをきちんと習っていたんだけど、忘れていたとか、そういうふうな感じがしました。

結局、自分の能力がなかった教えられないというか、僕らは先生になるほどですから、そんなに大した専門的な難しい大学の教授になるような力は持ってないかも知れないけれども、根本的な準備の力というのは必要であると思います。そして生徒にどれだけ伝えられていくかというのは、また別の問題で、先生としてやっていく中で、培われていくのでは、と思っています。

40. 司会 (市川)

ありがとうございます。だいぶ本質的な問題へと煮詰ってきているのですが。

41. 松浦先生—「教育実習不用論」には反対—

出原先生がかなり挑発的に言われたので、挑戦的になるかも知れないけれども、僕はこの厳しい教員採用の状況の中で、やはりしっかりした力をつけて、たくさんの人が教員になっていく、そのためには大学での教育実習、あるいは教職、そういったものは僕は学生と一緒に充実したものに作りかえていかなければならないと思っています。

そういう点で出原先生が消極的に言われたので、実習とか、そういうものは余り意味がないという所まで言うておられないでしょうけれども、しょうもない実習だったらいらんという意味だと思うのですけれども。そういう点ではこの厳しい教員採用の中で、出原先生の意見はややアナーキーな考えと違うかなと思ったのですが、そのへんどうですか。

42. 司会（市川）

確かに情勢の問題ということもありますけど。

43. 奥野先生—実習経験が支えに—

奥野ですけど、教育実習で学ぶ点はいろいろあるということがありますが、その中で、教育技術とかを学ぶのは意味がないという出原先生の提起はどうでしょうか。

長年教職につけば、1カ月くらいの実習は短いものだと言われるのは、その通りだと思うんです。ですが、例えば新卒で初めての人が、その時に、どのように授業をしたらいいのか、最初から授業を成立させなければいけない、その時に実習で習ったことというのは、やはり非常に役立つのでは、またその経験しかないと思います。経験といえば、自分自身で学んだ経験しかないんですね。最初の1カ月か2カ月というのは、実に死ぬほどの思いになるということがあるわけです。そういう時に何が支えになるかというと、実習で学んだことが非常に大きな影響力を持つのではないかと、そういうように僕は思っています。

44. 司会（市川）

ありがとうございます。

司会としては嬉しい悲鳴で、ほとんど意見が出ないのではないかと心配していたのですが、いろんな論争的な問題も出ました。時間がそろそろ来ました。学生の方、最後に。

45. 村田君—指導案に疑問を感じる—

村田ですけど、実習校では、どうしても最初に出す学習指導案というか、あればかなり強調されて、どうしてもそればかりに力を注いでしまい、いざ授業という立場に立つと、どうしてもその指導案に沿わなければいかんいかんということになってしまって、自分の思っているようなことができない。

教科書を参考にして指導案を書いていますから、教科書通りの話になってしまって、授業をやるのも、ある程度の枠の中にはまった授業になってしまうというふうな考えがあるのです。

私の持っていた疑問ですが、なぜ教育実習であんなに指導要領、指導案が重視されて、指導案、指導案と言われてやっているにも関わらず、現場にいざ出た場合に、指導案を書かない。本当に指導案が現場でいるのかという疑問を持ったのですけれども、その点についてちょっと聞きたいのですけれど。

46. 司会（市川）—教育実習と大学教育を結ぶものは何か—

指導案については、どの程度必要なのか、そういうのは討論されていると思うし、討論してきたと思います。いま質問という形で出されましたが、時間も時間ですし、もし、どなたか、学生の方からでも、先生の方からでも、今の質問についてあれば、お答えいただいて終わりにしたいと思いますし、なければ課題ということで、この場は打ち切りらせて頂きたいと思うのですが、どうですか。今の指導案の必要性について、果たしてあれだけの指導案の授業をやることを、実習でやるのが必要かということ。

せっかくいま質問が出たのですが、機会のあるごとにいろいろ先生方に聞いたりして頂きたいと思います。それで、まとめは出来ませんが、司会がこういうことを言うのはよくないのかも知れないけれど、私の個人的な感想を言えば、これから大学で学んでいくのに、実習から得た課題をどういうふうに生かすかということ言えば、例えば、指導案をどう書くか、どう発問するか云々ということだけに、狭い意味でのそういうことに目が行くと、課題を持って帰ってきて、目が向くのは大学では、教職科目とか、教材研究だけになってしまうわけです。実習で学んだもの、例えば専門が物理なら物理学を学ぶ、あるいは生物なら生物学を学ぶ、社会学を学ぶ、そういう中に持ってくるものはないのか、そうじゃないと僕は思うんです。そうじゃなくて、実習で得た課題というのは、各専門で、それを学問を深めるといふ所にも持ってくるものはあるはずだし、例えば子どもたちの分という筋道、もっと深い分かり方は、こうなんだよと子どもたちに迫っていけるような、そういう深い理解、深い分かりかたを、大学の学問研究の中でこそやっていく必要があるし、そっちのほうも少し広く考えてもらいたい。

教職科目、いわゆる教材研究法ということだけに実習課題を持ち込むのではなく、もっと広く、あるいは大学生活そのものに、そういう課題を持って帰るといふことが出来るような、広いとらえかたが必要なのではないだろうか、抽象的な言い方になっていますけど。そういうようなことを思いながら、聞かせて頂きました。

ご協力ありがとうございました。

47. 福本先生

ありがとうございました。そろそろ議論が発展しかけた段階で時間になりました。少し残念ですがシンポジウムを閉じさせていただきます。

テーマにあります実習体験を通して、また先ほどのいろいろ話し合いの中から、それぞれ何かを体得して下さったのではないかと確信しているのですが、どうでしょう。

今回は初めての試みでしたが、皆さん、あと半年余りで教員採用の時期になりますので、教育実習、あるいは話し合いを通して、教員採用に向けて努力して頂きたいと思います。短い教育実習期間ですけれど、それぞれが努力されたと思います。また本日のシンポジウムに参加して下さいって何か得るものが有ったのではと思います。

本日は体験報告して下さいった学生さん、二人の先生方、司会の先生ご協力ありがとうございました。これでこの会を閉じさせていただきます。

*1) 今回は、教育実習に関する共同研究の場をもつことができませんでした。それは1昨年度の改革案を大学内で実施するために時間を費やしたからです。今回の事後指導改革を踏まえて、本年度あらたに「教師教育と教育実習改革プロジェクト」が発足します。研究はこの場に継続発展させられるものと思います。

*2) できるかぎり発言者の内容に近いかたちで編集すると共に、発言内容の主旨を踏まえて、見出しと番号を編集者の方で付けさせていただきました。